

特集「子育て支援 NP プログラム」

保育体験からの学び

— 乳幼児との関わりを通して得られたもの —

木本 明日香¹

筆者にとって保育体験は、子どもたちの変化を肌で感じるができる機会であり、非常に実りのある時間であった。実際に子どもたちと関わっていく中で、楽しさだけではなく戸惑いや驚きなど、様々な気持ちを感じることができたことは、自分自身の成長にも繋がる出来事であったと思う。

今回の保育体験の中で印象的だったのは、回数を重ねるごとに見られる「乳幼児の変化」であった。乳児グループにおいては、初回の頃は母親と離れると涙が止まらず、何度も扉を確認する姿が見られていたのだが、回数を重ねるにつれて泣く時間が短くなり、遊ぶことを楽しむようになっていった。愛着の形成されるこの時期に母親と離されるという体験は、乳児にとって非常に大きなものであることが大声で泣く姿から窺うことができ、泣き声から母親と離れたくないという思いが伝わってくる中で、どれほど母子の信頼関係があるのかを感じることができた。そして、そのように大事な人から離されるという体験をしつつも、自分の身を任せられる相手を見つけ何とか適応しようとする姿は、その場を受け入れるための対処方法であるように感じられ、人間の強さを実感することへと繋がっていった。一方、幼児グループにおいては、遊びの変化が非常に印象的であった。初回の頃は泣き止むのに時間がかかったり、遊ぶ範囲が狭いという特徴があり、スタッフ—子どもという関わり方が多かった。ところが、回数を重ねるにつれて、プレイルームへやって来ることへの抵抗感や、母親と離れることへの不安感といったものがなくなっていき、遊びに熱中する姿が見られるようになっていった。また、おもちゃの貸し借りや、譲るという行動、おかしの準備の手伝いをするなどといった社会性が形成されている様子を見ることができただけでなく、遊びの中で子ども同士が対決場面を作るなどといった集団を意識した遊びも見ることができた。これらのことから、個から集団への意識の変化や凝集性の深まりを感じることができ、集団で遊ぶということがどれほど子どもを成長させるのかを改めて感じることもできたと思う。

また、日々の生活の中で乳児に関わる機会が少なかった筆者にとって、今回の体験は乳幼児への関わり方を学ぶ上でも非常に役立つものとなった。初めは、おむつの替え方もあやし方も分からない状態であったのだが、周りのアドバイスや支えにより、少しずつできるようになっていった体験は、初めての育児と同じ体験を味わうことができたのだと思われる。しかし、我々が関わった時間とは週1回の3時間程度であり、周囲の支えのある場面での保育であった。このように考えると、ここで得られた母親の大変さとは、ほんの一握りのものでしかなかったのだと思われる。また、母親が我が子と離れる瞬間の表情や、再び我が子と出会う瞬間の笑顔を

¹ 広島文教女子大学大学院人間科学研究科教育学専攻

見ることができたことで、どれほど子どものことを大切にしているのかを感じることができた。そのような大切な我が子を、まだ育児経験のないスタッフに預けるということは、非常に勇気のいることであったのではないだろうかと考えられ、他者に託すということの重大さについても知ることができたと思う。

このように、乳幼児の保育を通して、母子の結びつきや子ども同士の結びつきを感じ取ることができたこと、そして受容的な態度を保ち続けることの難しさと大切さを学ぶことができる機会を得られたことは、臨床的な見方を育む上でも非常に役立ったと思われる。今後の臨床活動においても、ここで得られた体験を生かしていきたい。